古道と新道

池田敏雄

現在斐川町内で松江、出雲など、東西に通ずる大きな道路といえば、昭和40年に開通した国道９号線ですが、それまでは、どんな道が、いつの時代にどこを通っていたでしょうか、いままでにのこされている記録や地名、いい伝えなどによって、東西に通じていた道を、古代から順にさぐってみようと思います。

○「正西道」

出雲国風土記にしるされている道です。出雲国庁から石見の国に通じる奈良時代の末ごろまであったと思われる道です。

風土記によると、出雲の郡家（ぐうけとも読む・郡の役所）から郡境（ささふ村）まで、13里64歩（7.06キロ）、西の斐伊川まで、２里60歩（1.17キロ）とありますので、この道の長さは8.23キロメートルということになります。

郡家がどこにあったかについては、求院、求院と出西の中間、出西の随心、出西の稲城と諸説がありますが、この道が通っていたと思われる場所からすると、もっとも古い時代は稲城にあったと思われます。

古代は、徒歩が一般的ですが、富んだ人や役人は馬にのって通行しましたし、生産物などの物資の運ぱんを、多くは馬の背にのせて行なっていたので、地盤がしっかりしているところでないと通ることができませんでした。

ですから、湿気が多い平坦地、沼地の近く、海辺（湖辺）ぞいには道がなく、丘や山地の中に道が通じていました。

正西道がどこを通っていたかは明らかでありませんが、古代にもっとも使用していた馬に関係する地名、古くからまつられていた社、地形などから想定してみると、別図①のように通っていたように思われます。

馬に関連する地名を東からあげると、馬捨場（神庭谷）うば捨山（結）せき馬場（結）馬背（結・氷室境）有馬谷（氷室）駄捨場（出西）とあり、それがほぼ同じような間隔で位置しています。

古代における馬捨（うば捨・駄捨）というのは、乗馬者が馬からおりること、荷物をおろすことであり、せき馬場は剗馬場で、通路の警備所のある馬場（剗は奈良時代の用語）、馬背、有馬谷は字の通り、というように解すると一連の道を求めることができそうであります。

また、古くからまつられてあったと思われる社を、この一連の道との関連であげてみると、東から佐々布社　伊志見社（宍道）神代社（宇谷）諏訪社（神庭、元宮）波知社（羽根）波迦社（武部）実巽社（結）祇園社（結）曽枳能夜社（氷室）稲城社（出西）雲社（出西）の11社をあげることができます。

以上の二つを地形との関連で想定し、正西道を求めたものです。

○「筑紫街道」

筑紫というのは九州のことですから、京都から九州に通ずる道のことです。

これは、平安時代のころから通じていた道であるように思われます。天神さん（菅原道真＝平安時代）がお通りになった、とのいい伝えが残っている道です。

平坦地では道あとがわかりませんが、丘や山地の中では、その道の名と道あとがいい伝えられて残っているところがありますので、それを結んで筑紫街道を求めてみたのが、別図②です。

東から佐々布、伊志見、七日市、奥畑、守田畦、小丸子、後谷、綿田原、越田、西谷、羽根東、富士通予定地の北側、天神原、中平、駄畑、星田、随心、剣先、来原、のそれぞれの地を通っていたように思われます。

① 駄畑。九州の諸大名が参勤交代のときの休けい所があり、その時には、乗場や駄馬をこの地の原に放って休ませた、そのためこの地を駄畑という。また、結からここに通じる道を筑紫街道というが、昔大名が不動堂の前を乗馬して通ったら落馬したので、南の方へ道をかえた、かえたその道を駄道といまでもいっている（御大礼紀念調査書より）

② 随心。出西の中央にある地名。もとの字が随身であったとすれば、平安時代の郡家はこの地にあったと考えられる。

随身は、貴人が従者を従える、物品を携帯する、ということであり、この地には平安時代それに相当する郡司がいて、郡家で政治を行なっていたと思われる。

○「石州街道（旧山口街道）」

石州というのは石見地方のことをいいます。江戸時代のころ、松江方面から石見を通り、山口へ向かう道でもありましたから、山口街道ともいわれてきました。

斐川町と宍道町の境にあった伊志見の一里塚（国道９号線の脇にある）から軍原を西南へ登り、灘北（荘原駅の南）を通って北へ向かい、旧国道に出て荘原の町部を通り、西に曲って（新川がない時代）茅原に出ます。すぐにあった馬役の別所一里塚に至ったあとは、高瀬川の南岸を西へ進みます。直江町へ入っても高瀬川ぞいに西へ通じていますが、江戸中期以後は町部の繁栄によって、堀切道を北へ曲って町中へ出て西に向かうようになりました。そして岩野原の西から八頭へ通じ、出西・富村一里塚に至ります。やがて幸神松（いざり松）の下をぬけ、西に向かって斐伊川に至ります。（今の神立橋と鉄橋のほぼ中間）そして、すのこ橋を渡って大津の町へと続いていました。

慶応２年（1866年）松江藩が長州征伐に出陣したとき、この石州街道を武装した多くの武士たちが藩主を中にして笛や太鼓を高らかにならし、威風堂々と西に向かったが、征伐に失敗し、敗退してこの道を帰ってきたときは、実に無残な姿であった、といういい伝えが残っています。別図③が石州街道です。

○「新山口街道」・「国道」

明治22年に新道ができました。これを当初は新山口街道といっていましたが、大正９年に国道18号線に指定されてから、国道というようになりました。

これは国道９号線ができてからは、旧国道といわれるようになりました。その大部分は９号線となっ

ていますが、現状からいいますと、宍道町伊志見で9号線から南へわかれ、軍原―駅通り―荘原の町部―八雲橋―出東入口―茅原で9号線へ、そして、直江の町部へ入って、太才で9号線へ、神立橋東方500メートルの地点で南にわかれ旧神立橋、そして大津町の中を通っている旧道へと続いていました。別図④が新山口街道（旧国道）です。

○「国道9号線」（説明省略）

このように古代から現代までの間、東西に通じていた道路をみると、時代が進むにつれて、山地から平坦地へと移動していることがわかります。

縄文時代の山地の生活、弥生時代の稲作のはじまり、沖積平野の生成と人々の進出、町部の形成と経済交流、交通機関の発達、など、時代のうつりかわりを道路のうつりかわりが証明しているようで興味深く思われます。

それにしても、古代の正西道と思われるあたりに、現今、南部広域農道が通じるということは、今昔の感ひとしお、という気がします。

池田敏雄『斐川の地名散歩』昭和62年　より抜粋

斐川町内
古道と新道
①
②
③
④
⑤
剣先
駄捨場
岡心
星田
駄畑
不動田
有馬谷
馬背
せき馬場
馬捨場
天神原
0
1000m
① 正 西 道
② 筑 紫 街 道
③ 石 州 街 道
④ 新山口街道
⑤ 国道九号線